

自閉症とことばの成り立ち
一関係発達臨床からみた原初的
コミュニケーションの世界一

小林隆児著

(株)ミネルヴァ書房

(ISBN 4-623-03962-5)

A 5 版 223頁 2,800円

自閉症はまさしく謎の迷宮であり、一つのラビリンスから脱出できたとしても、新たなラビリンスが待ち構えているかのようなものである。一体、いつになったら、その真実の出口が見えるのであろうか……。おそらく、そこには、人間とは？ 人とは？ という哲学的な問いへの答えを要求するかのごとく、正解は永遠の謎に包まれ続けるのかもしれない。

本書は、著者の小林氏があとがきに記載しているように、自閉症の成因論に関する挑戦的な知見の集積である。ここでは、ことばの起源を「子ども」と「養育者」との深いこころの繋がりに求め、それがことばの成り立ちを形成することが記述されている。ことばが人間の属性として最も重要であることは、「最初にことばありき」という一句に集約されている。しかし、知的な問題でないにも関わらず、ことばを習得できず、情緒的な関係性を築くことの障害を持つゆえに、言語の獲得に困難を来す自閉症という一群の人たちが、本書の主人公である。

周知のことであるが、自閉症については、1943年のレオ・カナーの発表以来、成因、基本障害に関する白熱した議論が繰り返して行われてきた。当初、人生早期の母子関係の歪み、特に母親の養育態度に由来する情緒障害であることが強調されたが、科学的な実証研究などからこうした仮説は否定された。その後、ラター等の言語認知障害仮説が隆盛を極めた時代があった。現在では、パロンニコフヘンらの「心の理論」の実験で実証されたマインド・ブラインドネス、心理化の障害仮説が一つの潮流となっている。

しかし、これも定説化されたものではなく、例えば、ホブソンは相手の感情の読み取り機能の障害を提唱している。

小林氏は心因論、器質論の立場に拠ることなく、関係性の障害という素質と養育環境とが不断に交互作用する中に、自閉症の臨床像が存在しているという立場に立脚している。その関係性の基本となっているコミュニケーションについて、一般の言語による「象徴的コミュニケーション」と意識の介在しない「情動的コミュニケーション」に区分し、情動的コミュニケーションから象徴的コミュニケーションに変容していく発達過程が重要な課題であると指摘している。私は英国の対象関係論を専門としているために、小林氏の視点に対して、とても親和的である。英国の著名な精神分析家ビオンは、感覚印象は情緒的な包容過程を経ることによって、初めて経験として、それが象徴化（抽象化）されることを論じている。このことは、まさしく小林氏の指摘と同じ次元のことを示している。

次に、小林氏は自閉症の知覚様態が「原初的知覚様態」という認知形式、つまり知覚・情動・運動などの心的機能が分節化しておらず、それがいまだに融合している原始的な状態にあることを指摘している。これは自閉症の人たちが、時に自他未分化、あるいは人と物との区別すら認識できない世界の住人であることを示している。それゆえ、彼らは基本的な安心感を確立することができずに、対人関係に困難を来す。〈運動-知覚-情動〉体験が一体化してしまえば、ことばが成立することはない。

これに付随して、自閉症の愛着をめぐる葛藤に関してアンビバレンスという用語が用いられていることに、私は違和感を感じている。私は小林氏の基本的な自閉症の対人関係の問題に関する知覚、行動の様式のコンテクストには同意している。しかし、アンビバレンスという用語は、ある衝動と相反する衝動が同時に存在するために、心に葛藤として主観的に感じるものであると一般的には認識されている。多くの自閉症の人たちには、そうした葛藤を見出す心的空

間が十分でないために、これ自体を感じることはできない。それゆえ、これらは拒絶と強烈な接近行動として表現され、心に葛藤として存在すること自体難しい。勿論、小林氏は、こうしたアンビバレンツに関する誤解を避けるために、それに関連した記述と脚注を記載しているが、やはり別の用語で説明したほうが誤解を避けられるように思う。ただし、自閉症における関係欲求を強調し、それに対する〈知覚・情動〉過敏性で自閉症の行動様式を説明していることは興味深い。これは、発達途上にある自閉症の人たちの母親への執着や、他者も含めた人懐っこさを想起させるが、彼らはあまりに対人関係に稚拙、過敏で、生きていくのが難しい人たちである。

次に、小林氏は〈運動-知覚-情動〉という一体化した体験からの分節化が、関係性支援の重要な介入であることの実例を挙げながら、説明している。この際に、「分かち合いコミュニケーション」という情動的コミュニケーションと象徴的コミュニケーションへと移行する過渡的段階を明示している。これは二項関係が未だに明確に分節化していないコミュニケーションの形態であり、お互いの内的表象を「分かち合う」ことを一義的な目的としたものである。この記述は、英国の小児科医かつ精神分析家ウィニコットの移行段階、移行空間の概念に近いものを感じた。さらに、小林氏は養育者から文化まで発展させて議論しているが、移行空間の概念も、遊び、創造性、文化の領域での基盤となることをウィニコットは指摘している。主観的でも、客観的でもない領域を育むことが、治療的介入の根幹となることを、両者はいみじくも同じように語っている。

最後の2部には小林氏の生き生きとした臨床実践を垣間見ることができる。乳幼児から成人に至るまでの自閉症のことばに関する問題行動を網羅している。小林氏の治療態度は一貫し、一見、意味を成していないであろうと思われることばにもならないことばですらも相手の世界の住人になることによって、それを理解しよう

と試みていることである。教条的、大人の世界観で、自閉症の人たちのことを理解することは、到底不可能なことである。意味を見出すこと、共感的なコミュニケーションこそ、自閉症の人たちが原始的コミュニケーションに囚われの身になっているラビリンスから脱出する唯一の根本的な対策であることを、本書は私たちに教えている。

（白百合女子大学：木部則雄）